

## 平成 27 年度 海外学生派遣事業 報告書

所属： 文化科学研究科 地域文化学専攻

氏名： 金セツピョル

渡航先： RAI International Festival of Ethnographic Film , Granada Centre  
for Visual Anthropology, The Natural Death Center (イギリス)

渡航期間： 2015/6/12-2015/6/28

報告者は本事業の助成を得て 2015 年 6 月 14 日から 28 日までイギリスに渡航し、①14<sup>th</sup> RAI International Festival of Ethnographic Film での映像人類学作品上映と発表、②Granada Centre for Visual Anthropology の見学と授業参観、③The Natural Death Centre に所属する Natural burial ground 三箇所についての調査などを行ってきた。

以下、①～③で行った研究活動を報告する。

### 1. 研究活動について

①14<sup>th</sup> RAI International Festival of Ethnographic Film での映像人類学作品上映と発表

Royal Anthropology Institute、The Watershed Cinema in Bristol、The Department of Archaeology and Anthropology, University of Bristol、The Center for Visual Anthropology, USC Dornsife, LA, California が主管する本民族誌映画祭は、2015 年 6 月 16 日から 19 日までイギリスの Bristol で開かれた。

報告者の作品「We Don't Need a Grave」は 17 日の Wiley Blackwell Student Film Prize セッションで上映された。上映後は質疑応答の時間が設けられており、3 人から質問を受けた。

一つ目の質問は、研究者ではなくブリストル市民からのものであった。どうやって被写体の人たちと深い関係を築くことができ、プライベートな領域まで撮影することができたかという内容であった。これに対して報告者は、長い期間の人類学的フィールドワークの中で十分なラポールを形成し、お互い親密感をもっていることを伝えた。

二つ目は、日本の伝統的な葬儀および埋葬はどのようなものかということであった。この質問に対して、「先祖代々の墓」とそれに対する自然葬選択者たちの反感、墓の購入と継承の問題、仏教離れと自然回帰への憧れなどを簡略に説明した。

三つ目は、日本の火葬儀礼についての質問であり、質問者はヨーロッパの火葬につい

て詳しく説明してくれた。

上映と発表以外にも、多くの作品を拝見した。そのうちもっとも印象的だった作品は Kim Loginotto の「Dreamcatcher」である。アメリカ・シカゴで働く若いセクswーカーたちを助ける、一人の女性の活動と、そこで起きる様々なドラマを生々しく描いた作品である。作者自身は人類学者ではなく映画テレビ学校を卒業した人物であるが、作品は被写体の人々との親密な関係の上で作られ、何よりも当事者視点で描かれているところが映像人類学作品に近いと感じた。

Kim Loginotto 以外にもテレビ・映画製作学校の在学者、卒業者の作品が多く、映像人類学作品とドキュメンタリー作品の境界は何かという根本的な問題をもう一度考えさせられた。

そのなかには、エディンバラアートスクールの Luis Correia, Noemie Mendelle, Amelia Frazao Moreira によって製作された「Sculpting the spirits」のように、映像人類学作品とは程遠いと考えられるものもあった。アフリカの精霊という、人類学でよく扱われる地域と素材を描きながらも、奇異な風習に対するエキゾチシズムから製作されたように感じた。映像人類学作品は被写体と被写体が属する社会に対する深い調査と理解があって初めて作られるのかもしれない。

そのほか、Jordi Esteva の「Komian」という、ガーナのシャーマンと儀礼に関する作品から、撮影・編集技法の面で多くのことを学んだ。まず感嘆したのは、ショットの種類がとても豊富であることだった。全体を見渡すショットからミドルショット、アップのショットなどがリズムカルに交差し、儀礼のダイナミックを表現していた。特にミドルショットの使い方が効果的であった。また、儀礼シーンの最後にスローモーションをかけて次のシーンに転換する手法は、儀礼の非日常性を伝えるのに適していた。

日常性と非日常性を明確に対比させる構成も参考になった。特にシャーマンがトランス状態の顔から日常の顔に戻るシーンをカットせず長々と撮った部分が印象的だった。

「Komian」はインタビューとセリフが少ない作品であったが、ダイナミックな儀礼映像のおかげで72分という時間もあつという間のように感じた。いつかこのように映像の力だけで物を語る作品を作りたい。

また、人類学者が調査をしながら片手で撮ったような作品はほとんどなく、プロのような撮影と編集技術の上で作られたものが大多数であった。テレビ映画製作系出身者の作品が多く、またほとんどがチームワークで作られているからだと考えられる。それぞれ長短所はあるだろうが、今後、国際映画祭で活動するためには、より映像技術を磨く必要があることを痛感した。

## ②Granada Centre for Visual Anthropology の見学と授業参観

グラナダ映像人類学センター（以下、グラナダセンター）は1987年、マンチェスター大学社会人類学専攻内に設立された。映像人類学の修士課程と博士課程があり、300本に至る学位フィルムを輩出している。国際舞台で活躍する多くの映像人類学者がここで修学し、今回のRAI映画祭においても、グラナダセンター卒業者のフィルムが多数上映された。

グラナダセンターでは、映像人類学作品と4000字の作品説明で学位を取得できるシステムになっており、映像作品を重視する伝統をもっている。このようなシステムは、映像人類学が発達したイギリスでも唯一だという。

報告者の基盤期間の教員にセンターの講師を紹介してもらい、施設を見学することができた。グラナダセンター内にはビデオライブラリーがあり、学生たちはここでDVD、VHSを借りて、隣の部屋で見るか自宅に持ち帰って見ることができる。また、編集室が10室あり、各部屋の中にはMac Proとディスプレイ二台が具備されていた。卒業フィルム製作の際は、チームごとに一室を占有して編集に取り組むという。撮影の際は、センターでプロ用のHDビデオカメラを借りることができる。

驚いたのは、テクニシャンの存在である。テレビ産業で30年以上の経歴をもつテクニシャンが撮影録音機材のメンテナンスを担当するほか、ビデオカメラの動作やサウンドレコーディングなど、技術面で学生たちをサポートしているという。報告者にとって最も厄介だったのがこのような技術的な部分であったため、大変うらやましく思った。他にも卒業フィルム製作の際は、数人の講師が各チームに付き沿って指導しているという。

グラナダセンターの規模は大きくないが、充実した環境で、人類学と映像製作の両方を学べる場であることがわかった。今年は修士・博士合わせて30人程度の学生が入学したという。

## ③The Natural Death Centre の Natural burial ground 三箇所についての調査など

1991年、The Natural Centre（以下、センター）は、イギリスで最初にNatural burialを提唱し、世界に反響を広めた。イギリスでNatural Burialとは、遺体をなるべく自然分解可能な形で土に返す埋葬方式を意味する。生態主義的な考え方や自然回帰志向に基づいた新しい葬法であるという面で、報告者の博士論文テーマである日本の自然葬と共通しているところが多い。この度は博士論文の考察に広がりをもたせるため、Natural burialを行うNatural burial ground（以下、グラウンド）三箇所についての調査を行った。また、Natural burialが既存の埋葬方式とどのように異なるかを知るた

めに、各訪問都市にて市立墓地や教区墓地、ウェストミンスター寺院を見学し、資料を収集した。

事前にセンターのマネジャーと連絡して調査許可を取り、どのようなグラウンドを訪問するかを決めた。イギリス全国には多数のグラウンドがあり、それぞれ団体または個人が運営・管理している。センターは、望ましい **Natural Burial** 普及のために一定の規則を設け、それに合致し、また一定の会費を収めるグラウンドに対して会員資格を与えている。

この度は、センターが求める **Natural burial** とは何かを知るために、センターが直接に管理運営するグラウンド（ロンドン郊外の **Eden Valley** グラウンド）、普通会员のグラウンド（ダラムの **South Road Cemetery** 内 **Woodland Burial Trust**）、非会員のグラウンド（エディンバラの **Corstorphine Hill Cemetery** 内 **Woodland Burial Section**）を一箇所ずつ訪ねた。

センター直管理のグラウンドは、遺体が埋められていることがわからないほど、標識も供物も一切見当たらなかった。センターは、だれの遺体がどこに埋められているかを **GPS** を利用して管理しているが、木を植えること以外の標識は認めていない。また、花、食べ物、飲み物などの供物は、自然環境に害を与えるため、遺族が帰ったらすぐ片付けているという。

グラウンドの自然環境に対する基準も厳しい。芝生などを人工的に植えず、もともとその地に広がっていた景観を尊重することが望ましいとされる。環境の管理は、接近容易性や安全性を確保できる最小限のレベルにとどめている。また、自生している植物種の保存が優先され、遺族が記念樹を植える際も、外来種ではないかなどを判別する必要がある。

それに対して普通会员のグラウンドは既存の墓地内に位置し、より緩やかな基準のもとで管理されていた。石で作った墓碑は立てないが、木で作られた標識が埋葬場所にあり、故人の名前、生没時期、故人に送る言葉などが書かれていた。また、供物も放置されていることが多かった。

非会員のグラウンドは埋葬場所がわかるのはもちろん、埋葬場所と離れたところではあるものの、石で作った墓碑が立てられていた。また、埋葬したところに遺族が花を植えたり、置物をおいているところが多かった。

これらの三つを比較して、イギリスの **Natural burial** は、いかに既存の墓の形を排除し、イギリス元来のものと想定される自然景観を実現できるかが重要視されていることがわかった。

興味深いのは、大体のグラウンドが散骨を受け入れてはいるが、望ましいとはしてい

ないことであった。火葬という自然破壊的な工程を伴い、また骨灰は土にリッチすぎるというのがその理由であった。日本と韓国において「自然葬」が散骨、または焼骨を埋めることを意味している状況とは大きく異なっている。

## 2. その他

この度は本助成を受けて、設定した目的を十分に達成することができた。ただ、今後、地域文化学専攻および比較文化学専攻学生の海外調査に対する助成が継続される場合は、通信費、コピー・郵送費、現地助力者への謝金など、幅広い資金枠があった方がありがたい。